



淺草文庫

日迅之

伊勢物語に富士はかろしと志保
歌人千志保一山氏秘中と予海濱に
塩竈は煙と見一に海民塩と鏡くに序(鳥)



砂と製て堆となり一砂と仍も湖あり事りて砂と
引(予)所ありて湖と日ふかりて後砂と積り山嶽と
形に日に暖に(予)と志保之利と云云に富士は
形他とあり海也志保ははく秘(予)事一にわ
新若菜小岳を志保のふりて時(予)之知人(予)

たふ(予)これ(予)者秘(予)て(予)と(予)一(予)也
。或曰民城東敷山ハ統瑠殿此(予)竹と柱(予)事(予)何(予)也
所(予)也(予)予(予)名家に(予)一(予)首(予)花(予)峯(予)大(予)師(予)也(予)是(予)也(予)

五臺山此竹と振こし抄事也振中堂乃前に入
孫ひし其竹産の根と分て東都にくし至法
流此後らる事しにん所くひらる是も亦大明
院此文の流がこしく有くてありし傳はりし也
○辛丑四月十八日尾赤念友郡横志村龍雲禪寺奇
宿此僧赤山火化せしとてく奇異の事にして
傳はりし 自坑あり大と鏡其師と向 各す自偈と唱（辞）せハ 吳徳園村下 此産にして十四日
あり利徳し文學ひり傳はりて魚はり本食なりしを
凡上古此名徳持身らりしるわに事をせ此者は横いて
これと借ひんやま文又ぶて死と思ふ事ゆから
しくざりしやそしく推暢鬼惱さま魔の流

奇持と現せしく知りたくし一実り捨身此者わる人
志ぬ山谷とありにかる材所此中さりしと生し竹妻の
曰言といひししく禪世此偈と亦名すきりしに
かく送他て直りるん禪子此半にわ次れ亦物多き
業証の果すありしんし

○我國大定之昧此例ありしく抄桑略記治暦二年
二月十日奇修し四條坊教如堂位修文家於鳥郡此焼
身之あり又元亨釋書し吉徳文祠官隱送傳の事
此外燒身の人有しや又わり傳はりし直に東都
しく游戯此妻子多燒身の事して又は傳はりし也引も
○和俗家の伝号と名字と呼はれしと近世名し字の事

つゆわたりぬるりし苗字なりしかくハ布与強きしはや
これハ中比武家出でせし者ナリ郷里本貫の名田の
字アサナと呼アサナしり名字と云天正十條侍者人此名と字アサナ
そとれしたるハ病也と云く呼も同しりんハ
一人と云んものり一條殿九條殿二家此社号花山
院徳寺花山院氏住持寺氏云こと云ふ
なり一近世名字に氏と云て武田氏長尾氏を今云ふ
古書ハはなま事之このは又云と姓と書し梅家の
學士と姓ハ梅中と記せりいさや姓氏ハ首より勅授に
て今ハ新小姓とも氏もいんハ忘懐ナリ事之
○山城國相樂郡日本記と云ハ綺田村と事申右記ハ加

波多しから事はせり又ハ紙帳今昔とも記しり氣
と解帳ハハ梅田毎有れ名ハ依てたり解帳ハ
あり事一處也と蛇そんせしハ解帳ハ蛇と教せ
ハ物記著し集人ハ昔物記ハ載し梅すり小
氣素交息尊蛇と斬リ稲田娘とたすけ多ハ
事とかり物とく存せれるとすらるハ綺田村の神
延喜式に綺原坐建伊那太比賣神社と云せらるは
初り也

○同郡祝園祓も同しり轉語り日中記ハ
羽誓苑と記し神祇ハ式ハ祝園神社と云ハ和名ハ
柗女苑と云也今去リての事祝園村と里俗ハ不之村
祝園社あり

くさくさ箭之介をのこはさうきねん云道代り

。蛇に足のあるもの希は有つて云百餘抄保安三年五月

十四日一條故二品親王白川堂若狭守茶居蛇り出来

為太被食教りとをねらふ

。藤原南家の祖武智磨とつて式ハタケ干て下流の

洲より日本紀新紀古者為尊貴為武智ト云

テルト云へ大日靈又貴の貴

。足利公方家乐山殿と稱一室町殿と稱一祐永の初

祖と文明十六年六月勅命と降一そせし一京華集

。公方家御所と名中と評義は云りけり祐永ト

とありて御所と名中行事一云々

。東武志園坂本養玉院天台の古院にてと云二明

院と稱せ一慈眼大師東殿創建と初白々極

家と云く世宗に濟一と初云鳥九家息院主の時

初云初と立て此はの素と勸故云子母家息某

僧初と素云流山祀せと二明院の初流と云

禁一と云く世宗と改一揚玉院と云

ま中をせり云言に三川と初流天台に日蓮と豊流

海上一念と初解得と云初流と云

初流進を又台門と二明の初流初流に三三初流

初りしと云の惑いと云

御土御門院明應九年に崩御朝廷衰微より

花よりうらや

財交者密財盡而疎

ありて下たりしはけりなむ人の情にせり
ありて下たりしはけりなむ人の情にせり

色交者親色衰而絶

らよりきぬのこころゆとりの中は未だ朽山

らんこころ

陳懋學事言要云曰蕪州府神運殿馬鞍山昔惠

郷修道于此有神前現願役鬼玉壘石為殿

ふゆ幡摩石ノ玉壘石似り役鬼之
ふゆ幡摩石ノ玉壘石似り役鬼之

日湖月湖在寧波府 我志州日吉月吉
村

瓜哇國旧傳鬼子魔天與一圓象相合音餘子常以人血

肉云是所謂鬼子母神

。家尾城南為山寺山寺と龜嶽山といふ寺僧明心

初より額と筆とん事とらふ山嶽於山寺の堂

二つとるは福とんてて龜嶽林書してあり

りる。あし梅よりふ里邦に嶽山といふ人多し

陽列岳嶽山均州太嶽山徽州白嶽山及朝鮮北嶽山有

衛列電峯山瑞列美山嶽山及南安府羊嶽山此嶽と

峯といふ嶽といふと山といふと嶽といふと嶽といふと

南海ふあ人々をわたり形傍のしつかへ渡海の舟

舟入りて之をく坐せりて終るは西のふたれわ

と云觀抄篇邵より後く又くつらつら國四必れ何り

はゆりり信ふ海小信りし

治らる士足言の山房や山房といふは信抄の巻末に
いふ所のちゆりゆりまの事と云ふ

譜牒をまよふたまふ何士善く宗教に詳しり異邦

清明其祖とあるけ申家流皆令し名常と云ふ

不の象象と申しして子孫と云ふんせしむ若ぬ象

味ふしとぬく福し文をのち應瑞と云ふゆは懲戒

しして攻免しし又右有單と云ふ家系と他に考或ハ

自雁つして唐と云ふ痛し一は流と云ふれり

考のしハ家系をて刑に處と云ふ一は家

考の其比姓申流と云ふ一は父の實業と云ふ

後世の流と云ふものぬれ高の重貴と云ふ事

の我國古の事し流の信牒と云ふ事し法部

省の無殿し一は中務省に呈し一は書寮に記し

し一はあしと云ふ事し記し一は藏の録に記し一は上

又唐と云ふ事し一は保し一は其早と云ふ事し

親む人多く申ふのふと云ふ事し一はあはれ

あはれ人の言ふ事し一は

。趣、白根越る山が竹をく但信系後記ふては

先と云ふ事し一は

しと云ふ事し一は

後の三州に云ふ事し但上宮太子の雲上記し

国古志山とて下志部とてゆりて之部在浦古志郡

和後細湖中こし湖とてなす古志郡

○昔明北殿司好書將軍義持公に侍りて云々

あつて居て云々

公上の御事と云々

幸中と云々

人等と云々

と云々

境内と云々

今を法師と云々

此の寺と云々

此の寺と云々

世俗に書かれた五大力菩薩の御事

りありありとて曰梅とて

男合とてありありとて

章にありありとて

○帰家日記三冊是ハ京極高曲讀外九竜

御事井上氏元禄二年夏東

ありありとて

ありありとて

ありありとて

ありありとて

天龍川詩

天龍河上天龍去 龍去河留二水流

世一者其園久々後とつて五年と云ふれ其節に
ありしは自らも自ら自立するに依りてありしを
京より入るに

千一と云はるは是は澤に於てありし一節堂に著る佛とす
の
はるにせしりありしとすはるにせしりありしとす

。親書末徒其寺院と摩次にせし今其彩と事と
。今其彩と事と
。今其彩と事と

。文にせしし難は事柄とを卒業ありしと云ふ
。文にせしし難は事柄とを卒業ありしと云ふ
。文にせしし難は事柄とを卒業ありしと云ふ

。蓮上人云文明十二年十月栲皮書其清氣堂造其
玉間四面十二年四月阿弥院堂上柱二万箇是城國新
此中坊

。花山院中煩礼然也書寫山等淨業其日古記且云
。花山院中煩礼然也書寫山等淨業其日古記且云
。花山院中煩礼然也書寫山等淨業其日古記且云

。千載集並大僧正等老幼并ありし其大僧正等
。千載集並大僧正等老幼并ありし其大僧正等
。千載集並大僧正等老幼并ありし其大僧正等

。公記三十三所其書ありし其大僧正等
。公記三十三所其書ありし其大僧正等
。公記三十三所其書ありし其大僧正等

。そと照らひしはるしと云ふれ其節に
。そと照らひしはるしと云ふれ其節に
。そと照らひしはるしと云ふれ其節に

。三十三所其書ありし其大僧正等
。三十三所其書ありし其大僧正等
。三十三所其書ありし其大僧正等

六角堂中山に於て清光寺に於て其節に
之直にありし其書ありし其大僧正等
と記しし其書ありし其大僧正等

坂東の人
又何事あるか
又何事あるか
又何事あるか

山院は皇
山院は皇
山院は皇

田舎人の
田舎人の
田舎人の

郡鄙の
郡鄙の
郡鄙の

新始
新始
新始

文亀二年
文亀二年
文亀二年

普賢堂
普賢堂
普賢堂

但般若
但般若
但般若

賢象
賢象
賢象

所乗
所乗
所乗

白象
白象
白象

白
白
白

小野
小野
小野

井手
井手
井手

光慶
光慶
光慶

一首
一首
一首

光明寺
光明寺
光明寺

諸
諸
諸

富家
富家
富家

園
園
園

と
と
と

と
と
と

と
と
と

と
と
と

書ノ外ニサケ見
ヤスキマウニルヲ云
牙笏 長通スラニテ守唐
隔子 入格眼トモ云異邦四封九行

梅板 折身宛 碗 青 碎磁 指金 漆金 上 漆金 下

嵌金 サワゲン 箔 テハズ 閃 トリウナ 漆靴子 シタ 角面 スハ

扣 シツケ 把 ニキリ 背 トタケ 嚆矢 カブラマ 天鵞 鶴云我俗 水胡荽 少鴨

鴨 アヒ 鵜 日本云 萬頭鳥 日本云 白頭公 四ナカラ

鱸魚 日本ノス 糙米 古メ 龍糠 スリヌカ 芝麻 カマ 金線草 以キ

稻子 モミ 混拍 ヒロク 撥針 五粒 剛教樹 シク

茉莉 今俗云 茶葉

○ 乙未の月或ははて殿東へ渡りて之の味をいひし
この味はさきとちがひありし砂をいひし味とちがひありし

いしなるやうなり海中より海へ打本俗砂をいし味をい
と妻へ捨しメウシト稱しける人にしてはるるをいし味をい
本ウシト評寛文九年下蝦夷の酋と別ヤウシ上蝦夷の
ハカセしといひつづるの今に昔より多岐と記せし
根糸のうに作せしやせし人上下の各をいし味
津将家ハ民ケリ男と云ふ女と云ふも評女はもつる
アとしていひつづるに西にいひし味をいし味をいし
唐草ハ花と云ふも評草は軽なる草をいし味をいし
にまらばいし味をいし味をいし味をいし味をいし
いし味をいし味をいし味をいし味をいし味をいし
いし味をいし味をいし味をいし味をいし味をいし

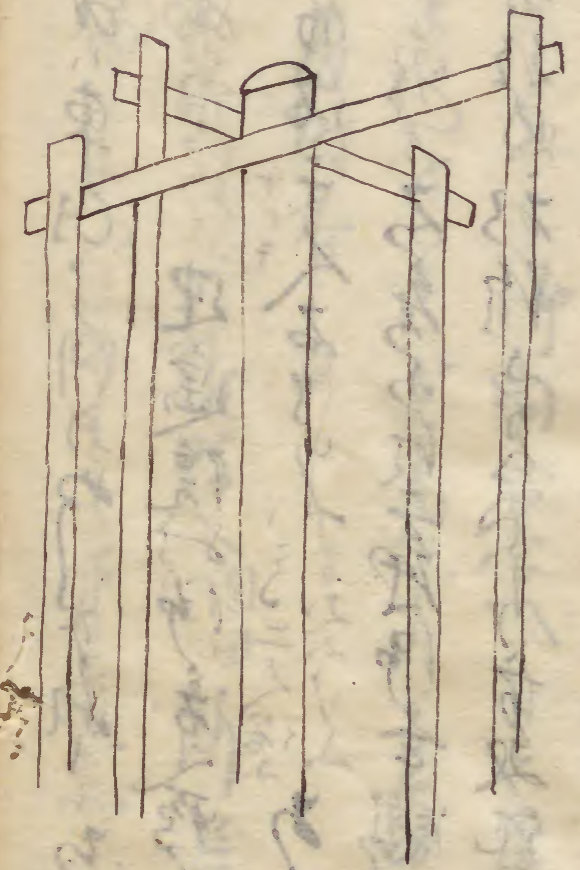
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる

つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる
つひに比ねれ靈のまを人の涙の義ぬる

式問傳傳二所太神言造者此思の類と神祕乃
 事ありしと多白凡神々の神事此家客易あり云
 多々傳ありし心神柱記と傳しるに人同命初々
 造造の由りて豊らの天降本記に四徳え五行 地
 形多ししと經に神七五人五綵の條と記經ひ八重
 拂石て歸りしと一各志柱又人の神行式ハ人
 御量板等名あり二所神宮の建つ天流社ハ人
 無事と云神柱中ハ入事一人地と三人也一續石
 ありと云て二又古事記在る五穀の條と播き又土公の
 事ありし由神柱記云へり此亦古傳ハ内宮在直
 家にありし凡地身は謝名名等の事ハ神柱記

有りしと云はる陰陽家の法に少の意家の意塔乃
 地は今夜と建金臺と埋り五綵の條と板ふりとい
 る穀乃粥酒の意ハ下下より傳あり古は之神事ハ
 中より陰陽のり又客家ののり多しといふ
 事ハ多しといふ也

心御板の意 本武の系に傳ありて



南

西

東

北

○ 〇りきめ、東ひよりのりきめとらひさしおるふ
くもをゆつとて建遠院にゆか、病も明かぬら
の病の回復千人石とて二三人塔ありとてうらやうあつとてあつとて
これらも唯のる病もあつて二層伊年あつとてありとて
ふも病の回復のりきめとてあつとてあつとてあつとて
しるのりきめとてあつとてあつとてあつとてあつとて
ゆつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

○ を列乾のりきめとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

十人出あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

○ 三位中の家法法流を備わす朝日村ふるをあり
古き甲あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

○ 揚列君年譜ナセ巻、新撰人園田所選之揚列上記
揚列一編ナセ巻、新撰人園田所選之揚列上記

鞭鞘のなほつらふらふとわらふ運後
その馬より所いしやま

天正寺四ヶ院 凡大寺ふ昔此四院のちり也

敬田院 衆生帰依の場勸惡修善の處
是坊舎なり

施薬院 栄竹とて方になて業と別る

療病院 元化病とて業と別る

悲田院 貧乏無頼の民を集めて住せり
本名とて名を

梅よりんはく瑞洲に名ある国官論中三子よとて
廿費のりた多ひとてやふとて寺村時田道頓様大
海にたふも兒言行の化ありとての余用とて地
を有願するもとて長まると稱とて元後世とて名を

とて

泉列塚原の寺 日三子京 下傍某法に還信したる三

卯と稱し自陸とてとていなりとてたてた歌鳴りて
うとて神とていなり

○我府下永壽寺、浅井由兼守長政卿の菩提道場
なりとて今、法也ゆくとていなりとていなり

○水毎寺、野負菴道松居士 忌日六日

○土佐寺とて山形ありとていなりとていなりとていなり
○土佐寺とて山形ありとていなりとていなりとていなり

○糧冷飯團の寺の異名のみ、清船を載りて土佐寺
の宮に尾極の寺なりとていなりとていなりとていなり

○ 嫁水

興業字目見毫列老君碑元賢所書額字樂府ニ字アリ留詩
ナ小書ス蓋藻二目シ元菴ノ談

○ 大好

音鳥 音美 音美 音美

大明

音車

音車上声

はしむるのまの語はふハニマシる

○ 笑

興業曰元菴カ曰日文間ニ文於文書先聞其連続之字而後答之
曰不然則字同語入者文書是なり

○ 侍と 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 同ニシテ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 平字よりいひふらふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りや 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

○ 侍りふやとを字より五字の式ニ平式ハ反格に足通

泉字を名づくる教へし和山法華の意見
名のせりふら竟満不明のほしと入の
情のこころをいありひとあらはれし
はくし福のありしとあらはれし
まひしとあらはれしとあらはれし
めらるしとあらはれしとあらはれし
人とのあらはれしとあらはれし
世のあらはれしとあらはれし
賢者のあらはれしとあらはれし
りしとあらはれしとあらはれし
あらはれしとあらはれし

信をかりしとあらはれしとあらはれし
信をかりしとあらはれしとあらはれし

○昭中の致平教王
光十將堀河在たたくはらも若
殿上人あそわわめりた一人主あありて
のこころの人の思ひありしとあらはれし
室方よぬしとあらはれしとあらはれし
みわしとあらはれしとあらはれし
つしとあらはれしとあらはれし
てお家しとあらはれしとあらはれし
りしとあらはれしとあらはれし
らしとあらはれしとあらはれし
はしとあらはれしとあらはれし

死をすれりて了れぬ人てふは
ふもなるるをてしめぬる相ふつと
何れせんとしてあてはるる相ふつと
三井寺 出家 亦小慶作圖初め 富ふ入りたる中
成信二十三在十將重なる二十五とす入りて
任令この事しとまして行成大御言
よみしむるしむるあつと
おひしむる人とあつりぬる中に
とてさるるあつと

○尾南野田月海人御を幸
信長中自も四

法所と東無感無の智あり 慶長中
神君は幸に好む多し何事は了らるる
啓し人きり作ありは長田戦ふれ
にやむるは傍からいひしりのまに
よむる地無ゆたはさし
神君思ひのあふありは 慶長中
簡多し少きや流事なきし命
下し物いしとまふ事れはのまら
来因法所 信長 あつとて彼等と源
かくしきさし 次快意法所 信長 任おの
御所正虎行を幸るるあつとて信長に

一條大納言

滋野井中納言

油小路中納言

今出川中納言

風早中納言

車露寺中納言

同中納言

油小路前大納言

庭田頭中將

傳奏

奉行

諸家勅文

天業

周易曰聖人以通天下之志以定天下之業

元文

周易曰高宗受元吉文在中也

大曆

晉書曰應大曆唐聖也相兼

享保

後周書曰享茲大年保有萬國

明寶

藝文類聚曰後子明辟還兼寶國

石

素原

式部權左輔之素原長義

保和

周易曰乾道變化各正性命保合太和乃利貞

元長

周易云元者善之長也

天明

孝經曰則天之明德之利以訓天下

萬寶

文選曰蕩平人乎萬寶以之化

和德

周易曰和順於道德而理於義窮理盡性以至於命

右

高辻

文章博士之素原總長

傍ありとわらふなり

伊勢皇太子の檀林皇后の剣建なり
主阿上人以来財家の守りし事なり

。さし年亦却年迄某河にありし也醫者には病に可也
七鞭八刺刺れ悲多嬰孩の痛呼に似たり自ら頭腦
くく心腹割けしと云ふ事多許多松止にありしを
み辨くしとけし二日しつう曉ねの死に死せし事な
女毎く胎胎と云ふ事ありて年以てしと鳴呼壞胎
は悪業と云ふ活命の事兒と毒殺せし次報
まありしと云ふ事邦にたかると云ふ名に名に医家
系所の白牡丹と云ふ事小作の事と云ふ事と云ふ事
ゆりしと云ふ事一思ふに病了胎疾頭腫漬御聞へし

大に呼んで曰數百櫻兒来て胎袋と云ふ事苦痛し
と云ふ事胎を以て胎胎と云ふ事と云ふ事と云ふ事
不く我くめし所畜の方事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
涙と街せしして所に死るる事と云ふ事と云ふ事

